

2010/12

## リサーチ

No.113

通巻  
170

平成22年12月10日

発行者  
北海道公民館協会  
会長 松藤 藤吉  
〒060-0002 札幌市中央区北2西7  
かどる2・7 (9F)  
道立生涯学習推進センター内  
011(271)5453



去る、九月二十八日・二十九日の二日間にわたって、第五十四回北海道公民館大会「根室大会」(兼) 全国公民館連合会北海道ブロック大会が、根室市を会場として開催されました。

バラ色の未来と夢見ていた二十一世紀が始まり十年がたちました。そ

## 第54回北海道大会「根室大会」が開催

北海道公民館協会会長 松藤 藤吉  
(中富良野町教育長)



■ 日本がこれからの社会教育に望むこと。そして公民館の役割／基調講演

大会は、根室市総合文化会館を会場に、遠くは渡島管内を含む全道から百五十人の公民館職員、公民館運営審議会委員、社会教育委員、関係者の皆さんが参加しました。

開会式では、長谷川根室市長、高梨根室教育局長のご祝辞に続き、当初出席予定であった鈴木寛文部科学副大臣からのビデオメッセージが紹介され、「人と知恵」による教育と地域振興について、話されました。

の間にも、住民が求める要求や課題は複雑化、多様化しています。こうした現状や、住民の思いに公民館は答える努力をしている一方で、指定管理者制度の導入等の経営的課題や、住民の学習支援を担うべき公民館の役割等が問い合わせられています。

そこで、本大会のテーマは、「地域で公民館が担う『こと』、そしてこれからの公民館は」とし、より実践的に参加者のみなさんが現場から、地域からの思いをもつて議論を深めることをねらいとしました。

大会は、根室市総合文化会館を会場に、遠くは渡島管内を含む全道から百五十人の公民館職員、公民館運営審議会委員、社会教育委員、関係者の皆さんが参加しました。

開会式では、長谷川根室市長、高梨根室教育局長のご祝辞に続き、当初出席予定であった鈴木寛文部科学副大臣からのビデオメッセージが紹介され、「人と知恵」による教育と地域振興について、話されました。

その中で戦後教育が抱えてきた、個人の要望に偏重してきた公教育から、社会の要請にシフトする動きと能率化路線を走る学校の現状から問題を提起し、その可能性として、地域の教育力の再生に触れました。

さらに、地域を支える社会教育としての実践機関である公民館と北海道の現状、マイナスの状況も交えて説明があり、「公民館活動による、むらづくり・まちづくり」を提言されました。



に北海道の「公共」の歴史からその地域社会の特徴に触れ、北海道の公民館と社会教育の問題点に切り込みました。さらに、参加と自己責任による新しい北海道・地域社会の再生と公民館の使命を提言しました。

■各職員、各委員が求められている

続くパネルディスカッションは、

口寿久氏、国立博物館館長・前文部科学次官錢谷眞美氏、北海学園大学の内田和浩教授、北星学園大学の河野和枝准教授により行われました。パネラーによる、北海道の社会教育と公民館の現状から、国の教育行政公民館の歴史に話題が転じる中錢谷館長から、文部科学省で社会教育行政を担つててきた経験を踏まえ、ユーモアの中にも示唆に富む話題と提言があつたところです。

また、第一日の夜に行われた交流会は、地元ジャズバンド演奏や根室会・鹿熊会長は挨拶の中で、納沙布岬で北方領土を望んだ体験に触れ、「根室大会に参加して、北方領土の近さを実感した、これまでも話題にしてきたが、これからは一層この問題を訴えて行きたい」と述べて、会場の拍手を受けていました。

多くの人が聞き入っていたのが印象的でした。

根釧地区からの参加者が多い中、

域住民の学習機関であれば当然のことでしょうが、それはどこかで北海道、そして日本全域につながっているのではないか。最終日は、強い風でしたが、秋の青空に恵まれました。

納沙布岬へ向かう根室半島は、三方の視界が海に開け、たとえようがない美しさでした。

## ■私の街の公民館（社会教育）は！ 「グループワーク」

その後、ロシア首相の北方領土訪問が外交課題になつたことはご承知のとおりです。

■ 北海道の公民館が忘れてきたモノ  
～講演～

続く講演では、NPO法人・教育支援協会代表理事 吉田博彦氏が公共を行政（官）が独占する時代から、企業やNPOをはじめ民間の様々な主体が連携して「公」を作り出す「新しい公共」の考え方を紹介。特

第二日目に開かれたグループワーキングでは、前日のパネラーが各五部会に参加し、それぞれ部会のテーマにそつて行われました。前日の、公演、パネルディスカッションに啓発されたためか、参加者が担っている講座やリーダー養成、体験活動などの実

北方領土問題が根室の課題か、北海道の課題か、国民の課題か、表現に迷うところですが、四島出身者が多く居住する根室市にとつては地域課題でしょうし、広くは国家的な課題に間違いありません。





社団法人全国公民館連合会

会長 鹿 熊 久 三

## 「熟 議」

昭和二十六年十一月に「全国公民館連絡協議会」が結成されました。それ以来、さまざまな事業を行い、

昭和四十年に社団法人化して現在に至ります。来年は結成六十年。そのような中で本会は新しい公益法人制度のもとで、引き続き公益法人として歩みを進めていくために準備を進めています。これまでも同様ですが、公益法人は「公益目的事業」を中心に行います。本会の公益目的事業は言わずもがな「公民館の振興発展」です。

九月に開催された「北海道公民館大会（根室大会）」に昨年に引き続き参画させていただきましたが、準備の段階から情熱あふれるみなさんが携わってきたことが伝わってくる大会となりました。この場を借りて衷心より敬意とお礼申し上げます。さて、その情熱は、それを支える「目的意識」がないと物事を成就させることもありませんし、持続する

ことも不可能です。前述した本会の「公益目的事業である「公民館の振興発展」は、地域の社会教育の充実をもたらし「地域社会の健全な発展」を実現します。これはまさに公益目的事業以外のなにものでもないと言えます。この大会の実施に注がれた関係するすべてのみなさまの情熱はまさに「地域をよくしたい」という強力な想いが根底にあったと考えています。

大会当日は、鈴木寛文部科学副大臣から熱く、強く発せられたビデオメッセージが届けられました。公民館が期待されている表れです。

### 國で進めている「地域主権戦略会議」

議では、議題の中心になることがあります。権限や財源が自治体に移つてきても従来型の行政サービスの提供に終始していくはこれまでと変わりません。地域共同体として、そこに住むすべての人々が当事者意識をもつて「地域運営」に当たらなければなりません。十一月二十三日に講

話も進んでいて十二月開催の同会議では、議題の中心になることがあります。権限や財源が自治体に移つてきても従来型の行政サービスの提供をすれば、死活問題でもありますし、その議論は熱を帯びてきます。特定業界の集まり以外でも「学校教育はどうあるべきか」というテーマで話をすれば、自分が通った経験、自らの子どもたちを通わせる、あるいは通わせたことでの関わりから、我先にと「もの申す」ことでしよう。このように、当事者が当事者意識をもつて参画すれば自ずと議論も動きも活発になります。地域のみなさんも活発になります。地域のみなさんに当事者意識をもつてもらうように働きかけること、その場を提供する

ない」と。

共同体として如何にして課題解決に取り組むか。情熱ある公民館関係に立ちはだかる高く厚い壁です。

その壁を乗りこえるのは、とても大変な知恵と労力が必要となります。

しかし、その壁には、今まで登らなくて「向こう側に通じる扉」を見つけることができるはずです。それが「熟議」です。なぜ壁を乗りこえなくていいのか、なぜそこに扉があるのか。

人は「会話」をします。自分のことを一生懸命話します。現在の悩みから自慢、あるいは過去の武勇伝まで、あらゆることを話します。仲間が集まり自分たちのこと、例えば漁業の町で漁業関係者が水産資源の話をすれば、死活問題でもありますし、その議論は熱を帯びてきます。特定

つい先日、十一月二十五～二十六日に「北海道公民館協会後志支部研修会」が実施されて、その様子が公民館海援隊で報告されました。「こんなにしゃべった研修会は初めてだ」「うちの公民館でもやってみたい」という想が寄せられたそうです。熟議は公民館活動復権の起爆剤となります。地方分権に耐えられる地域力をとりもどすために当事者である我々「公民館」から地域の当事者である地域のみなさんの意識や気持ちに点火しようではありませんか。

こと、その精神を普及させること、結果として地域社会の健全な発展を促すこと。これはまさに社会教育が担うべき使命です。

鈴木副大臣本人もシンポジウムの席などで述べられているように熟議は新しいことではありません。まさに公民館が担っていたことです。教育支援協会の吉田博彦代表理事の言葉を借りれば「もともと熟議は公民館の専売特許」となります。同じようく「新しい公共」という概念も新しいことではなく昔からありました。

しかし、「新しい公共」と表現しなければならない、公共に対する新しい考え方を持たねばならない、我が国が崩壊した「地域社会」という共同体がもつ現実があります。

## 全国公民館研究集会終了

今年度の「第三十二回全国公民館研究集会研修大会」は、「地域の核となる公民館活動の創造」、これらの公民館のありかたをテーマに、十月十四日・十五日に石川県金沢市において開催されました。

全体会場となつた県立音楽堂は、金沢駅前おもてなしドームの前にあり、アクセスには大変便利な立地条件にあります。ここに全国の公民館関係者を始め、生涯学習・社会教育等の関係者約千六百名が「歴史と文化の地」石川に集い、実践活動の紹介や研究協議を行いながら、共に学び合い、今後の公民館のあるべき姿を熱心に学習しました。

北海道からは前会長の占冠村長  
中村 博氏(全公連監事)を始め、



道公協事務局の成田みえ氏、江別市教育委員会社会教育委員の金井征子氏、そして道公協事務局長・富良野市の遠藤の四名が参加しました。

記念講演では、県立美術館館長嶋崎 丞氏が「いしかわで花開いた美術・工芸」と題し、石川県金沢市の歴史、伝統工芸や古美術等の概要と共に、人間が文化に対して関心を持ち、作りあげたものを長い年月をかけて集積する、それが伝統というものであり、地域の文化・個性になつていく、と話されていました。

また、一五八三年、前田利家が金沢城に入城し、城下町金沢の基礎が築かれた頃から盛んに文化に対する経済投資が行われ、「前田家なくして石川県の文化は語れない」というほど現在でも人間国宝が数多く排出されているそうです。

二日目は分科会が開催され、六分

一日目は、開会行事において全員で公民館の歌「自由の朝」の斎唱後、全公連鹿熊久三会長の挨拶、文部科学大臣(代)・石川県知事・金沢市長の祝辞があり、最後に平成二十三年度の開催地、九州ブロックの佐賀県に大会旗が引き継がれました。

引き続き、文部科学省生涯学習政策局社会教育課課長補佐 平川康弘氏から平成二十三年度の概算要求事項等の施策説明が行われました。

アトラクションは、オーケストラ、

アンサンブル金沢のヴァイオリン、ヴィオラ、チェロの弦楽四重奏と春日朋子さんの音楽堂のパイオノルガンによる演奏でした。

科会に分かれて事例発表を基に、熱心に意見交換をしていました。

各分科会名と研究テーマはつぎのとおりです。



全 体 会

○「第一分科会～生涯学習社会の中核としての公民館」、テーマ「生涯学習の振興に果たす公民館の役割」

○「第二分科会～家庭・学校・地域の連携」、テーマ「家庭・学校・地域の連携による社会全体の教育力の向上をはかる上での公民館の役割」

○「第三分科会～高齢化社会」、テーマ「高齢化社会の中、コミュニケーションの活性化をはかる上での公民館の役割」

館の役割」

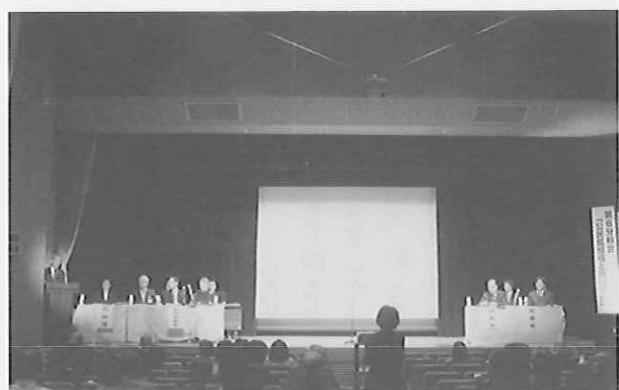
○「第四分科会～公民館活動と現代的諸課題」、テーマ「環境問題及び情報化社会に対応する公民館活動」

○「第五分科会～男女共同参画と人権教育」、テーマ「男女共同参画と人権のまちづくりを推進する公民館活動」

第六分科会の公民館組織と職員研修では、研究テーマが「地域から期待される公民館とするための組織及び職員研修のあり方」で、福岡県福岡市博多区と石川県金沢市の事例が発表されました。

福岡市では、一小学校区一公民館を原則に整備を進めており、現在一四六館の公民館があり、博多区には二十二館設置されています。非常勤特別職の館長（週四日程度の出勤）と主事（週二七・五時間勤務）を配置しており、仕事をカバーするため公民館補助要員として有償ボランティア（一時間六八〇円）を三〇五年名依頼し、来館者対応、事務補助を行っています。館長、主事、ボランティアの選考は、館長が自治協議会で人選し、主事は館長へ依頼し、ボランティアは館長の裁量によるそうです。また、公民館運営審議会は平成十六年度より公民館運営懇談会に変更して設置しているとのことです。公民館に対する指導助言は、従来教育委員会が行っていたのを、平成十

が所管をしています。博多区では平成十八年度より「『コミュニティの自律経営』を支援する公民館の役割」をテーマに二十一の公民館が四ブロックに分かれて、プロック毎に研究テーマを選定し研究・協議し、その成果を発表することにより、博多区の公民館全体で共有化を図っています。今後は、校区自治協議会と公民館が連携し、公民館が本来持つてゐる機能を活用し、より地域への貢献度が高いものとなるよう努めていくことが重要であるので、職員の資質向上のために、公民館職員研修を体系立てて計画的に行っていくとのことでした。



## 分 科 会

金沢市の公民館は、金沢方式で運営などを行っており、市直営の中央公民館二館と各地域の地区公民館振興協力会が指定管理者となり運営している地区公民館が六十館あります。金沢方式といわれる運営方法で、地区公民館の館長、役職員、金沢独自の公民館委員は無報酬のボランティアで、建設費（二十五%）、運営費、施設整備費の一部（一／三／一／四）は地域で負担しています。公民館事業の推進は公民館委員による専門部体制（広報部、青少年部、体レク部、文化教養部、総務部）により開催されています。金沢市公民館活動の集大成として金沢市公民館大会・公民館フェア“楽集”が年一回開催されています。公民館職員研修は、金沢市主催による年一回の館長研修、主事研修（毎月開催）、事務員研修（年一回）、新任研修（年度初め）、役職員研修（年一～二回）、社会教育主事講習受講への助成などが行われ、他に各館毎でも県外視察研修や公民館委員研修等を実施しています。研修の成果として、地域住民との円滑なコミュニケーションが図られ、効果的な事業の実施・運営が行われ、その後の課題は、若年層の取込、施設の老朽化対応、役職員等の担い手確保、研修内容の多様化・専門化、災害拠



点としての機能の充実等が挙げられていました。

平成二十五年度の大会は北海道が開催当番地であり、富良野市での開催となります。来年度から本格的に開催準備を始めなければなりませんが、道内公民館の協力がなければ開催できませんので、成功に向けてよろしくご協力願います。

なお、来年度の『第三十三回全国公民館研究集会』は、平成二十三年十月十三日・十四日に佐賀県佐賀市で開催されます。財政状況が苦しい地方自治体ですが、多くの公民館関係者が参加されるようお願いいたし

## 地域おこし協力隊

喜茂別町 副町長

内 村 俊 二

一、朔北の理想郷から限界集落に  
わたしたちは、「天の時」を得、「地の利」に恵まれ、「人の和」を求め、開拓した先人の強い意志と創造の精神を受け継ぎ、豊かですなおな心を養い、たくましいからだをきたえ、高い知性をみがき、文化と産業の調和をはかつて、希望と誇りに満ちた町、朔北の理想郷の建設につとめます。

これは私たちの町 喜茂別町の町民憲章の一部です。

喜茂別町は、北海道の南西部尻別川の上流部に位置し、北海道でも指折りの豪雪地帯であり、道都札幌市に隣接する人口二、五〇〇人に満たない小さな町です。

昭和初期からホワイトアスパラガスをはじめとした農業と缶詰製造工場などにより最盛期の昭和二十年代には人口が7千人を超えて、賑わいと活気のある、町民憲章に謳われている希望と誇りに満ちた町であり、朔北の理想郷建設のために町民が一丸となつて邁進する姿がみられました。しかし、農業経営では山間傾斜地の地形で、耕作面積が小規模であり、機械化による大規模農業には対応が



困難なため、条件の不利な地域から離農者が相次ぐとともに町の大きな雇用の場であった缶詰製造工場が急激な事業拡張と経営不振により昭和四十三年に会社更生法の適用を受け、人員整理、事業の縮小を進めたことに伴い、国税調査では昭和二十五年七、七六三人であった人口が昭和四十五年には五、一一五人となり二十年間に三分の二を下回るような急激な人口減少となりました。

このような中で、町としては補助事業により集落の生活環境の改善や農業生産基盤の整備するほか、働く場を確保するために中山峠に町営に

過疎化や厳しい町財政を何かと打開する道はないか、町は平成十四年から平成十六年にかけて羊蹄山麓五町村による町村合併の協議に期待をし、合併を目指すための協議会として法定協議会の加入を議決しました。しかし、他の四町村では合併の是非も含めて合併問題を検討するための協議会として考えられており、この合併協議は成就しませんでした。

しかし、構造改革を推し進める国三位一体の改革や地方分権の大きな流れは、人口の少ない町村をこれまでと違い自治体として認めないので、合併を目的とした法定協議会を立ち上げます。留寿都村とは仮に合併できたとしても人口五千人に満たない小さな町でした。しかし、もともとは一つの自治体であつたことや喜子どもたちの姿が消え、後継者がない高齢者の世帯が多数を占める状態となりました。集落での行事や葬祭にも住民だけでは対応ができない、いわゆる「限界集落」と呼ばれる集落が見られるような状況となつてきました。

## 2、町村合併に揺れる

過疎化や厳しい町財政を何かと打開する道はないか、町は平成十四年から平成十六年にかけて羊蹄山麓五町村による町村合併の協議に期待をし、合併を目指すための協議会として法定協議会の加入を議決しました。しかし、他の四町村では合併の是非も含めて合併問題を検討するための協議会として考えられており、この合併協議は成就しませんでした。



ではないか、財政的に立ち行かなくなるのではないか、などの不安をかき消すことはできず、町は平成十八年から近隣の二村と合併の勉強会を行い、平成十九年には隣の留寿都村との合併を目指した法定協議会を立ち上げます。留寿都村とは仮に合併できたとしても人口五千人に満たない小さな町でした。しかし、もともとは一つの自治体であつたことや喜子どもたちの姿が消え、後継者がない高齢者の世帯が多数を占める状態となりました。集落での行事や葬祭にも住民だけでは対応ができない、いわゆる「限界集落」と呼ばれる集落が見られるような状況となつてきました。

年から近隣の二村と合併の勉強会を行い、平成十九年には隣の留寿都村との合併を目指した法定協議会を立ち上げます。留寿都村とは仮に合併できたとしても人口五千人に満たない小さな町でした。しかし、もともとは一つの自治体であつたことや喜子どもたちの姿が消え、後継者がない高齢者の世帯が多数を占める状態となりました。集落での行事や葬祭にも住民だけでは対応ができない、いわゆる「限界集落」と呼ばれる集落が見られるような状況となつてきました。

年から近隣の二村と合併の勉強会を行い、平成十九年には隣の留寿都村との合併を目指した法定協議会を立ち上げます。留寿都村とは仮に合併できたとしても人口五千人に満たない小さな町でした。しかし、もともとは一つの自治体であつたことや喜子どもたちの姿が消え、後継者がない高齢者の世帯が多数を占める状態となりました。集落での行事や葬祭にも住民だけでは対応ができない、いわゆる「限界集落」と呼ばれる集落が見られるような状況となつてきました。

えました。合併協議会は比較的順調に進み、合併後のまちづくりプランも協議会の役員の努力によって完成間近となつたにもかかわらず、留寿都村の住民投票の結果、賛成を得られず、またしても合併は成就しませんでした。

### 3、安心して住み続けられる町をめざして

二度にわたる合併協議で他の町との考え方の違いや一緒に「事」を進めいくことの難しさを改めて思い知られました。

合併ができなかつたことにより、単独の町としてどのようにまちづくりを進めていくのか、町民と協働で



知恵を出し合い、誇りを持てるまちづくりを進めるため「きもべつ自律プラン」策定委員会を設置し、公募した住民等により作成した自律プランで、これからまちづくりの基本方向を「いつまでも安心して暮らすことができるまち」と定め、①住民一人ひとりが生き生きと安心して暮らせるまちづくり

### ② まちづくりを継続できる基盤づくり

- ③ 人が集い、憩えるまちづくり
- ④ 健康に暮らせるまちづくり
- ⑤ 定住促進のまちづくり
- ⑥ 地域特性を生かしたまちづくり

の六つの方針をたてました。

この自律プランのワークシヨツプで安心して住み続けるには、集落の維持・再生が重要な意見が出されました。また、平成二十一年度において北海道が限界集落対策として、集落支援員を活用したモデル事業を

実施し、その一つとして選定された本町のNPO法人が二つの集落を対象として、住民の意識調査を行つたところ、「本当は住み続けたいが、高齢となって車の運転等を考えたときに住み続ける自信がない」「若い人が居れば、住み続けることができる」など住民の本音の意見が聞かれました。この調査を基にした集落の懇談会では話し合いを重ねるうちに「高齢者が多いからといって何でも



あきらめてしまつて何かをしてくれるのを待つだけではダメだ。七十歳でも八十歳でも何かできることみんなで考えよう」というような前向きな意見が出されるような変化がみられました。

また、集落に住み続け、集落を残していくには、高齢者の生活を支援する仕組みや新たに移住を受け入れる方策を考えなくてはならない。自分たちは何をしなければならないという機運が生まれてきました。

町では住民の方々の思いを受け止め、何らかの方策を検討しなければならないと考えていたところ、国では各省庁で地域の取り組みを支援する枠組みがあり、本町に合うものを

検討すると、総務省が平成二十一年度から都市圏の住民が過疎や山村などの条件不利地域に住民票を移し、地域協力活動を行う際に、その報酬や取り組みに要する経費を特別交付税で措置する「地域おこし協力隊」の制度を始めたという情報を得たので、北海道を通して制度の確認をしました。この制度であれば、集落のお年寄りが望んでいる生活支援や行事の手伝いなどができるのではないか、財政的にも特別交付税で隊員の報酬と住宅などの費用や町民との連絡調整を行い協力隊の活動を支援する業務の費用も貯うことができるのではないかと考えました。

しかし、都会の若い人を募集しても本当に応募はあるにか、どういう体制で活動をしてもらおうかなど多くの課題が頭を過ぎりました。

モデル事業を実施したNPO法人の方々や集落のお年寄りからは、地域おこし協力隊への期待が多く寄せられ、その声に後押しされる形で、平成二十二年度予算に協力隊十名の人員費と住居の費用など総額三六、四〇〇千円を計上しました。

### 4、地域おこし協力隊に対する期待

地域おこし協力隊は本町にある集落を大きく五つの地区にわけ、それぞれの地区に協力隊二名、地元事情に詳しい集落支援員一名の計三名で、

地区のお年寄りの生活支援や集落機能維持に係わる支援を主な活動として行うこととしました。

予算を審議する町議会の三月定例会の前には、町が集落支援に対しても多額の予算を計上したということが、テレビや新聞などマスコミ各社に取り上げられ、特にNHKの全国ニュースで報道されたことから、その次の日から、地域おこし協力隊の問い合わせで役場の電話は鳴り続くこととなりました。正確に統計は取ってはいませんが、四月十五日に募集を開始するまで毎日のように一〇〇件を超える問い合わせがあつたのではないかと思います。

応募にあたつては協力隊としての活動が終わっても町に定住してもらいたいということを判断するため「地域おこし協力隊に活かしたい私的能力」と「二年後に喜茂別町でどのように起業・就業したいか」をレポートとして提出してもらいました。五月七日に応募を締め切りました。が様々な経歴の方から八十二名もの方から応募いただきました。

レポートには、この「地域おこし協力隊」という小さな町の社会実験に、今までにない働き方を求める切実な思いが載せられていました。現在はこれまでになく働き、暮らすことが大変な時代であるといえます。この大変な時代だからこそ、給

料や待遇はそこそこでも人の役に立つたい、自分の持っているものが何に活かされる場が欲しい、そして一番は都会の働き方では失われつかない地域社会とのつながりや自分の居場所があることが求められているのだと思います。

協力隊は集落のお年寄りが期待するだけでなく、社会との接点、若者の居場所としても期待される取り組みだと実感いたしました。

協力隊員は六月に九名、八月に追加募集により一名を採用となりました。

コンピュウタープログラマー、建設業、飲食業、整体師、会社員、画家を目指す者など多種多彩な人材が集まり、集落支援という新たな挑戦に試行錯誤の日々を繰り返しております。

5、いつまでも安心して暮らすことができる町を目指して  
協力隊は初めての集落支援の取り組みを通じて、本町に着任した時から見ると一回りも二回りもたくましさを増し、秋の農業支援などを通してお年寄りだけでなく、集落の多くの方から集落に欠かせない一員として認知をいただきつつあるところです。

協力隊の取り組みはこれからも山あり谷ありでしょうが、集落住民と一緒に実践活動の中から協力隊員がさらに大きく成長し、しっかりと自分の居場所を作りあげていくことを期待しています。

平成二十四年の春に十名は任期満了を迎えます。

この十名が定住をし、引き続き集

けづくりとなるのではないかと期待されるところがあり、社会的にみれば生活支援を中心として、隊員の特性に応じた起業や就業への活動によって、コミュニケーションや新たな働き方の創出が期待されるところであります。

地域おこし協力隊の活動は、地域住民の拠り所として生活文化の振興、健康や社会福祉の増進といった実践活動を深める中から、新たな公民館機能の再興を図る取り組みともいえるかもしれません。

落の一員として、「いつまでも安心して暮らすことができる町」の担い手となるよう、公民館活動の原点と言るべき住民の実践を積み重ねることにより、限界集落からの新たな挑戦がいつか大きな実を結ぶことを信じています。



## 命の大切さ

コズミックカレッジが

伝えてくれたこと

オホーツク・文化交流センター  
センター長 菊地 美鈴  
(網走市教育委員会社会教育課長)

平成22年12月10日

(9)

## 道公協広報(第113号)

網走市では、平成十八年度から「科学する心」を培う講座に力を注いきましたが、それが「命の大切さを育む教育」という認識はありました。

それからは、宇宙教育も、命の大切さを育む教育と位置づけ、科学する心を培う取り組みの一つとして実施しています。

**科学館はないけれど**

子どもたちの理科離れが危惧されていますが、網走市では従来、市内の子どもたちにさまざまな遊びを提供し、遊びを通じて学び、子ども文化を育てる「子どもフェスティバル」を継続してきました。そこで、子どもたちの理科離れをなんとかしたい、と平成十七年度からは、遊び感覚を取り入れた「科学コーナー」を設けました。

網走市では、平成十九年度から「科学フェスティバル」に変えてしました。それと同様に、参加した子どもたちの好奇心いっぱいに目を輝かせる姿に、オトナが大いに触発されたかもしれません。

集まつたのは、学校の教員や天体、物理、化学など理科の好きなオトナたちと、子どもたちの笑顔が大好きなオトナたちでした。

科学フェスティバル実行委員会では、いつまでも手伝いばかりではなく「仲間を増やして自分たちで指導できるようになろう」という声が持ち上るようになっていました。

### コズミックカレッジ を網走で



今年の科学フェスティバル。



オトナの科学教室大盛況

「科学する心」を育む事業が定着してきたころ、小学校の先生から、JAXA(宇宙航空研究開発機構)宇宙教育センターが青少年を対象とした教育プログラム「コズミックカレッジ」の地域開催を募集しているので子どもたちに宇宙を学ぶ機会を提供するため応募してみては、という提案をいただきました。条件がありました。開催地となるにはまず、東京で行われるコズミックカレッジ指導者セミナーを受講し、「今後、地域で宇宙教育ができるようになること」というものでした。

網走市には科学館がないので、指導者もいなく、最初は科学好きの集団「サイエンス北見」のみなさんの応援を得てスタートしました。

こうして理科好きの市民がボランティアで加わり、平成十九年度からは子どもフェスティバルのすべてを「科学フェスティバル」に変えてしました。

オホーツク・文化交流センターでは、科学フェスティバルをきっかけに、夏休み教室、冬休み教室も「科学する心」をテーマに開催することになりました。科学する心を培うこととは、「好奇心、冒険心、そしてものづくり(匠)の精神にあふれた独立的な子どもを育てる」という認識がありました。科学する心を培うことと職員も感じたからでもありました。

科学フェスティバル実行委員会では、いつまでも手伝いばかりではなく「仲間を増やして自分たちで指導できるようになろう」という声が持ち上るようになっていました。

科学フェスティバルのボランティアも更に増え、内容も確実に充実していました。

科学フェスティバルのボランティアも更に増え、内容も確実に充実していました。

そして、科学フェスティバルのボランティア指導者となるオトナを育成する目的で、「オトナの科学教室」も実施してしまいました。

「一億倍で見る原子の世界」「空気と圧力」「宇宙と人間」「生活中の電気」「鉄の舟はなぜ浮かぶ?」など、市内の学校の先生が講師となり、何人の市民が集まるのか少し不安もありましたが、「オトナになつても理科が好き」「子どもの驚く顔がみたい」と想像を超える参加者がなりました。

豊かな自然に恵まれ、星と大空が似合う網走にはぴったりの事業です。担当職員のがんばりがここからスタートしました。

平成二十年の夏、オホーツク・文化交流センターの職員と提案した先生の二名が指導者セミナーを受講し、「宇宙教育リーダー」の称号をもらっていました。この年九月にはJAXA宇宙教育センターの指導者と共にコズミックカレッジキッズコース（小学校一～三年生）とファンダメンタルコース（小学校四～六年生）を開催することができました。「大気圧を実験しよう」「真空実験装置で宇宙まで行こう」「ロケットをとばそう」「熱気球をとばそう」という学習内容でしたが、最初に「かぐや」打ち上げの映像を見せて、ロケットのしくみを子どもたち伝えてくれました。



「宇宙教育は命の教育」と的川先生



## 宇宙から想像すること？

翌年は、これをきっかけにJAXA主催団体となる「コズミックカレッジ」・「宇宙教育指導者セミナー」の二事業を開催するはこびとなりました。網走市が主催する「コズミックカレッジ」は、「宇宙教育リーダー」を取得した職員や地元の指導者中心に子どもたちへの指導を行いましたが、カムイロケットで北海道から宇宙開発を進めている芦別市植松電機の植松努さんの指導を得ることができ、子どもたちにとつて大変有意義な時間でした。

## 宇宙が近くなつた！

今年は、KU-MA（子ども・宇宙・未来の会）が主催する親子参加の「宇宙の学校」を季節ごとに開催しています。夏の「宇宙の学校」では再び的川先生にきていただき、小



3枚の写真から何を想像しますか

惑星探索機はやぶさの話を熱く語つていただきました。秋の二回目も終了し、冬の三回目には親子で発表会を予定しています。

また、今年から科学フェスティバルは、網走のオトナ達だけでできるようになつたのです。加えて中学校の科学クラブも、ガールスカウトもワークショップを受け持っています。



## 夏の宇宙の学校

コズミックカレッジは、宇宙開発やJAXAを遠い存在から身近な学びの場に変え、網走市にも宇宙の種を撒いていただきました。

科学館がなくても、プラネタリウムがなくても、子どもたちと真剣に向き合う市民と、そのサポートのために全力で取り組む職員がいて、網走は宇宙がとても近いまちに感じています。